

政宗騎馬像余話

小室達・日記から



6

はかごではなく、ちよっぴり無粋なトラクターではあったが、騎馬像はいよいよ五月十二日深夜、江戸ならぬ東京を出発した。

一江戸っ子には姿は見えぬ」とかで、白木綿五十皮で馬もろともぐるぐる巻きにし、二十六馬力のトラクターに乗せられて懐かしの奥州街道に向かった。

一一千二百四十尺騎馬姿の騎馬像はトラクターの出発にひかれながら十二日午後十一時半、東京日暮里伊藤新道所を出発、青

政宗公をしつぱり包んだ真様な巨体は雨に煙るアスファルトの路上でよく進める。

トラクターでよく進めるの七ダンプ政宗公の行列に沿道は車や人も、政宗公の騎像だと時速十時(十六キロ)の騎像の後を駆け抜けていく。原作者の小室達氏、鑄造所の伊藤和助氏が無事お国入りを祈願してのさんさ時雨の合唱だ。(5・14同)

小室はこの数日、荷造りの見学や写真撮影などで過ごしていたが、日記を見ると次第に高まる興奮を抑え切れなかったらしい。

5・13 今晩零時東京出発の貞山公大騎像は途中無事通過したであろうか。非常に心配なのである。明朝の出発のしたくや調整に明けけるなど忙だである。早目に床に入らんとすれどなかなか心配である。作者のあいさつ文をまとめる。

午後一時無事手都高首の電報をきけ大いに安心し伊藤君にも通告す。

青葉薫る国元へ

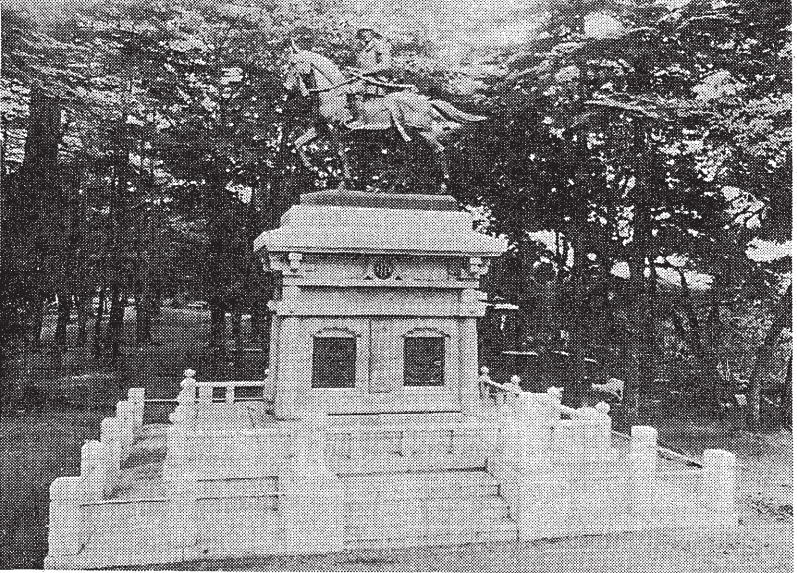
葉薫る奥州街道をお国入りのコースに書いた。出発のトタンに早くも省線ガードに政宗公の額のあたりがつかえて付き添いの人々の肝を冷やしたが、やっと入夫給がかりで無事通過。

白木綿五十皮で騎馬姿の

苦心の陸送4.5トン

翌十四日、小室はタクシーで騎像を追いかけた。トラクターに乗り込んで、無事お国入りを果たすまでわが目で見届けようとしたのである。

アルトの輔道にネオンの光を浴びながら千住大橋に出る。お供の自動車に従えて



小室は写真が趣味で自分で現像まで行った。これは政宗騎馬像を無事、台座に取り付け後、自分で撮影したものだろうか。東京の自宅に大切に掲げられていた。

昭和十年、小室達が精根傾けて伊達政宗騎馬像を作り上げた後、新たな難題が持ち上がった。高さ四・二メートル、重さ四・五トンの巨大な像を東京から仙台までどのようにして運んだらよいのか、という問題である。

当時の新聞を読むと、見出しだけでも面白い。

「うまく運べるか、政宗公銅像 塩釜の起重機は役に立たず 陸路でも心配な三橋(2・19 河北新報)」

「どうするこの運搬 三百年祭を控えて 仙台に來れない藩祖公銅像 大極みの関係者等」(4・5 同)

「横転、逆転を繰り返す 超驚(2)級車運搬 サテ、問題はい田鉄相のお頭」(4・18 同)

少し解説を加えれば、初めは東京から船に積み込み

塩釜で陸揚げする予定だったが、塩釜の起重機では騎馬像が重過ぎて陸揚げできない。急ぎよ、トラクターで陸送することになった。ところが、仙台南地方にある三つの橋が腐朽がひどくて渡れるかどうか心配。そこで鉄道輸送を思案中なのが、政宗公に横臥(が)して頂き愛馬もさ立ちや横にして運べばトンネルもすれすれでくくれる。

しかし、この案も鉄道輸送規定に照らすと違法。鉄道大臣が首をたてに振るか、ヨコに振るか、さあ大変だという内容である。

けんていごうの論議の後、結局は昔の大名行列を思わせるような陸送に決まった。もっとも、お供、